

【書評】

望月哲男編著

『ユーラシア地域大国の文化表象』

(ミネルヴァ書房、274 ページ)

ヨコタ村上孝之

(大阪大学教授)

Mochizuki, Tetsuo, ed., *Russia, China, India: Intercultural Dialogue*  
(Kyoto: Minerva Shobo Publisher, 2014)

Yokota-Murakami, Takayuki  
Professor, Osaka University

本書はユーラシア地域大国を論じた叢書の最終巻であって、文化の領域を取り扱い、ロシア・中国・インドという三国を比較している。もっともタイトルには「比較」という文字はないが、論集の趣意を説明する序章は「ロシア・中国・インド——比較の意味とその背景——」となっていて、この三者の比較文化的（ないし比較文学的）研究が目指されていることがわかる。

比較文学という学問は、今日の米国では文学・文化理論と同義になってしまい、「比較」などはもう実践されていないと言われたりするが、かつては比較という作業は当然ながら行われていたし、それに対する方法論的な反省もあった。ほぼ半世紀前にはフランス学派とアメリカ学派と呼ばれるものがあって、比較の方法について独自の立場を有し、それぞれに有効性を主張しあっていた。フランス学派は比較される対象はお互いに歴史的関係を持っていないとしないとした。アメリカ学派はそのような必然性はなく、両者を比較する何らかの理論的根拠があればいいとした。

本書を見ると、この二つの種類の比較が混在している。レーリヒのインド体験やトルストイとガンディーの交流を描く章はフランス学派の問題設定にしたがっている。そこには直接の、歴史的な、すなわち事実上の関係がある。だが、西洋音楽の受容のあり方を比較する章や、三国の世界遺産を検討する章はアメリカ学派の問題意識である。ロシアが西洋音楽を摂取した際に、中国の文化的エージェントが介在していたわけではない。ロシアの西洋音楽受容と、中国のそれが、歴史的には無関係だが、理論的に比照しうるというのである。

本書の各章はそれぞれに意欲的で、そこでは興味深い分析が提示されている。世界遺産の比較は宗教文化財ないしは記憶というものそのものもつ政治性を明らかにしたもので、斬新な視角の論考に思えた。第三部の三論文は神智学を通奏低音にしてインドとロシアの文化交流を

描き出し、それを立体的に提示してみせた。だが、それらの章が論集全体として（比較という作業を通じて）何を達成しようとしているのか不透明である。そもそも、序章の記述を根拠にして本書は比較を目的とした研究だと断じたが、終章には「各章の記述は、ユーラシア大陸の文化の総合的な性格づけを狙ったものではない。むしろ描写の観点や時間・空間をそれぞれの仕方限定することで、一定の状況に対する各文化の反応の様態を観察し、そこから現われる自己像や他者像を並行的に分析しようとするものであった」（251頁）と書かれている。ここでは、比較してどうこうというのではなく、ただ並べてみましたと言っているように聞こえる。それぞれ個別で独立した文化的事象だと述べているのである。別にそのような編集方針でも一向に構わないのだが、それは序章で示された「比較」という問題意識とは合致していないように見える。

「比較」という作業についての目的・方法・対象意識が必ずしも十分でなかったためだと思われるが、いくつかの章は「比較」の達成に苦心惨憺している。たとえば、西洋音楽の受容を比較検討した章だが、先にも述べた通り、ロシア・インド・中国の間で受容のあり方に歴史的関係があるわけではないので、それにも拘わらずそれらを並べて論じる意味を執筆者は必死に模索している印象である。「ロシア、中国、インドという文化的にも歴史的にも全く異なる経験をもつ超大国の音楽伝統を比較するのは易しいことではない。これらの国の音楽を単に並べてみてもあまり意味がないのは当然だろう（……）有意義な比較はいかにして可能か。そのためには3地域に共通する経験について考える必要がある。そこで浮かび上がってくるのが『西洋との出会い』である。」（23頁）

「比較」という行為を行うとき、われわれは普通、二つのものを比較していると考えがちである。だが、実際にはその背後に隠れた、第三の対象がある。佐藤輝夫という比較文学者の著した『ローランの歌と平家物語』という研究があるが、『ローランの歌』と『平家物語』を比較できるのは、両者がともに叙事詩（ないし戦記物語）であるからだ。これは論理学上、「比較の第三項 *tertium comparationis*」と呼ばれている。この比較の第三項を見つけるべく、多くの執筆者は苦労したようなのだ（本書はロシア・インド・中国という三者の比較だから、第四項を探すということになる）。音楽を論じた論文の引用に戻れば、比較の第三項は「西洋との出会い」（があった文化 [ないし音楽]）ということになる。

しかし、すぐに気がつくようにこの「第三項」はあまりにも茫漠としている。「西洋」などという実体が一枚岩的に存在していたなどと今ではだれも考えないし、一方、「非西洋」について言えば、今日の世界で西洋と全く接触しなかった地域や文化などおよそ存在していない。「西洋との出会い」を比較の第三項にして比較できる文化なり地域なりは無数にあるのだ。

もちろん、ここで「ユーラシア大陸における大国」という規定が利いてくるわけだが、その規定の問題構制を探る前に、もう一つの問題に触れておこう。それはここで比較されているのが「文化」（ないし地域あるいは社会）そのものだということである。その文化の中の特定の作品なり文学者（文化の担い手）が比較されているのではないのである。確かに比較文学・比較文化研究において、個別の作家や作品の比較から出発して、そこから文化の比較が導き出されることもある。たとえば、先に触れた『ローランの歌と平家物語』でも作者は、フランスの叙事詩の記述には自然はほとんど介入せず人間の心理の分析が主であるのに対し、日本の戦記物語では「自然と心象とが相銜し相交感」しており、そこに「フランス的精神と日本の精神の一つの型がはっきり打ち出されている」（下巻462頁）と述べる。だが、作者がこのような大

きな枠組みの文化比較を行うのは、大部の著書の中でこの部分だけであり、そのほかの場所では二つの作品を生み出した歴史的背景、両テキストの成り立ちや受容のあり方の違い、言語的・詩学的差異に密着した丁寧な比較が行われている。「フランス的なるもの」対「日本的なるもの」というような文明論的比較は、そして「日本文化の特質は自然との交感である」というような非歴史的な（したがって大雑把な）、本質主義的議論は今日ではますます懐疑の念をもって見られるようになっていけると言えるだろう。

同じことが（文化としての）ロシアと中国とインドの比較という問題設定についてもいえる。本書では（時間的にも空間的にも）非常に大きな単位としてのロシア・中国・インドが一しかも、それらは国家なのか、文化なのか、社会なのかも判然としないのだが——実体として振る舞い、比較されているのである。

このような比較が問題をはらむことは勿論だが、同時に、既に述べたように、本書の中にはさまざまなレベルの「比較」が混在しているので、ロシア文化とインド文化が比較されていたかと思うと、トルストイとガンディーという文化エージェントが比較されていたりするのである。しかしながら、それは逆にいえば、本書において、「比較」というものが、それがどのような行為で、比較の対象が本当のところは何なのかということが明確にされないまま、行われてしまっていることを示しているのであり、先に指摘した問題がやはり確認されるのである。

このような問題が生じてきたことの根本的な原因は、おそらく、本書の企画のそもそもの成り立ちにあったのではないかと考えられる。

それはまさにこの論集がロシア・中国・インドという「地域大国」を比較するという叢書の一環として構想されたからにはほかならない。そして、その叢書自体の問題意識はシリーズの先行する巻で説明されている。第二巻『ユーラシア地域大国の統治モデル』の序言では叢書のもとになった学術プロジェクトが説明され、そのプロジェクトを支える問題意識として、米国の一極支配という世界構造が終焉しつつあり、（そのような特定の時代的な枠組みの中で）かわってユーラシア大陸では中国・インド・ロシアの三国が地域大国として世界的影響力を外交的・軍事的・経済的に持つようになったことが指摘されている。書評子は国際関係論の専門家ではないので、この問題意識の妥当性を判断できないが、確かに最近の世界情勢はそれを裏書きしているようであるし、また、少なくとも、これらの三国は実際に国として、そして、大国として機能し、活動している。

それは国際政治のレベルでの話だが、文化は必ずしも国単位で機能するとは限らない。昨今の文化研究者はむしろそのような単位と合致しない文化的活動に関心がある。そこでわれわれはニューヨークの亡命ロシア文学者を調べ、日本語で執筆するアメリカ人作家の研究をしたりするのである。また、文化研究者は、国の経済的・政治的・軍事的力と、文化の力——それが「力」というような概念で語れるとして——が連動していないことを知っている（本書の「ヒーロー」の一人であるトルストイならばそのような考えを嘲笑うであろう）。

だとすれば、ロシア・中国・インド（という「地域大国」）の（文化）比較という本書の出発点はやはり疑問に付さざるをえない。国際政治上、ロシア・インド・中国は大きな意味を持っているのでそれをさまざまな角度から比較してみよう、そしてやはり文化についても見てみるべきだろうというロジックで本書の構想は生まれたのだが、この思考連鎖の最後の部分は、おそらくは企画の立案者が考えたほど自明ではなかったのである。

もちろん、本書が非常に面白い事例を紹介し、新しい視角を提供し、鋭い分析を多彩な話題

について提供しているのは間違いなく、それは大いに評価すべきである。「間メディア的行為者」の概念など、非常に有効と思われる分析の視座も提供されている。それにしても、同じ程度に興味深い論集を「ロシア・日本・韓国」という比較の枠でもおそらくは作れただろうし、あるいは「ロシア・トルコ・イラン」でも作れたであろうと思われるのである。本書が、「地域大国」という比較の枠を取り払い、さらに豊かで、確かな比較文化論集に発展していくことを願ってやまない。